古代山城国境での疫神祭祀地と主要な通路

関口靖之

はじめに

『延喜式』巻第三臨時祭条(1)に「宮城四隅疫神祭」と「畿内十処疫神祭」がみえ、四隅あるいは国境で疫神祭が行われていた。

境界での疫神祭祀は、自らの生活圏に疫気の侵入を防ぐこと、外へ出向く時の道中安全を祈るという意味があったようである。自らの生活圏と他の世界を限る限界が古くから認識されており、もともとは峠や川といった自然が境界のランドマークとして機能していた。後に、漠然としていた境界が、ラインとして認識されるに至り、自然の境界がそのまま使われたり、人為的にラインが引かれたりした。

侵入してくる邪悪なものである疫気とは、疫病を指す。疫病は古代においては、痘瘡（天然痘）と推定されている(2)。疫病については『日本書記』欽明天皇一三年（五五二）条(3)、『続日本紀』天平七年（七三五）八月一二日条(4)、『続日本紀』天平九年（七三七）条(5)にみられ、天平九年のものは大宰府管内から畿内そして東国へと流行

している。

大陸から伝わった疫病は、街道に沿ってやってくるということが当時認識されていた。古代の国家祭祀として行われた疫神祭祀地は、国境付近の官道沿には推定されている(9)。また、病原体が人や物に付いて移動するため、人々の集る「チマタ」も意識されたためであろうか、岐神（衢神）も疫神と認められ、街道に沿う地蔵もそのような意味を持たされていったと考えられる。一般にも何かの堺や峠には、瘡（神）神社や痘瘡地蔵などが祭られるように、疫神に対する信仰は広がっていった。

『続日本紀』神護景雲四年（七七〇）六月二三日条(7)に京師の四隅と畿内の十堺に疫神を祭るという記載がみられ、『延喜式』の臨時祭の条に似た記載がみられたり、陰陽道の四堺祭として『朝野群載』所収の天暦六年（九五三）六月二三日の官宣旨(8)にみられたりする。このように、境界での疫神祭は国家的祭祀として律令官制のなかで整備される。

また、疫神も死者の霊と結び付き御霊信仰となったり、神仏習合思想の影響でインドの祇園精舎の守護神ゴーズと国ツ神系譜の頂点にたつ荒ぶる神であったスサノヲノミコトが結び付き牛頭天王へと変化していった(9)。

『延喜式』巻第三臨時祭条にみられる「畿内十処疫神祭」は、山城と近江、山城と丹波、山城と摂津、山城と河内山城と大和、山城と伊賀、大和と伊賀、大和と紀伊、和泉と紀伊、摂津と播磨のそれぞれの国境で行われたことがみられる。平安京のある山城とそれぞれ接する国境、その外側の諸国と畿外の国境で疫神祭が行われたことがわかる。

本稿は、平安京の置かれた山城と接する六国の国境で行われた『延喜式』にみられる疫神祭祀地の比定および、平安京を中心に整備された当時の主要道との関係を検討する。疫神は、先に述べたように時代と社会状勢により変化し

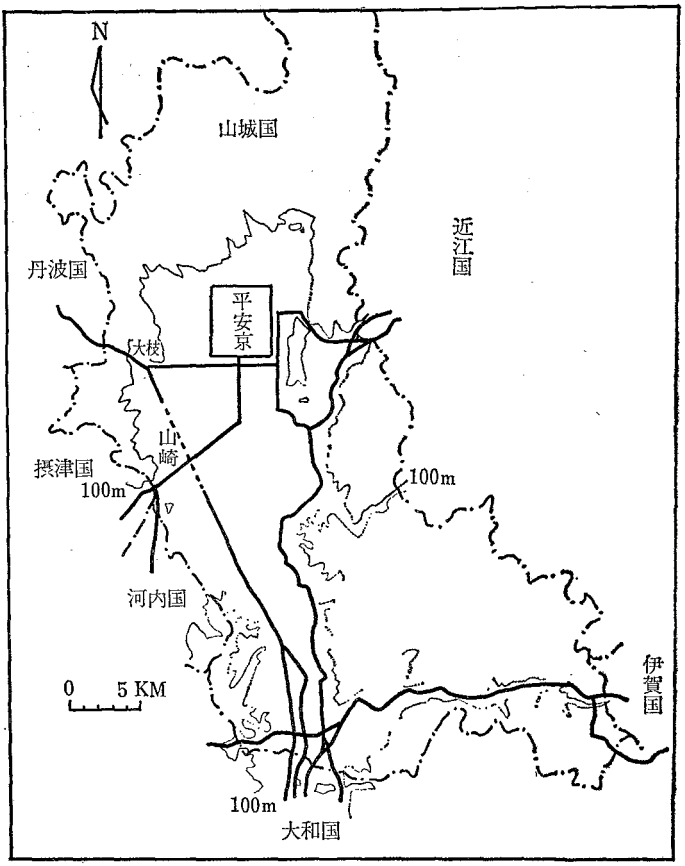

図1　山城国古代の主要交通路

ていると考えられるので、疫神と考えられる所を各国境付近について観察する。

一　山城・近江国境の疫神

山城・近江の国境は、山科盆地北東地域にあり、分水界を境とせず一部は山科盆地を東西に通う東海道上に乗っている。

山科盆地の大部分は山城国宇治郡に属し、奈良時代は木津川右岸を北上してきた北陸道が小関越で近江国へ通じていた。

長岡京時代には、山科盆地を北上してきた小関越の北陸道と大関越の東海・東山併用が近江へ通じており、山科で分岐していた。平安時代になると、平安京を出た東海・東山・北陸併用道は、日ノ岡を経て山科盆地に入り、小関越の北陸道と大関越の東海・東山併用道に山科でそれぞれ分岐し

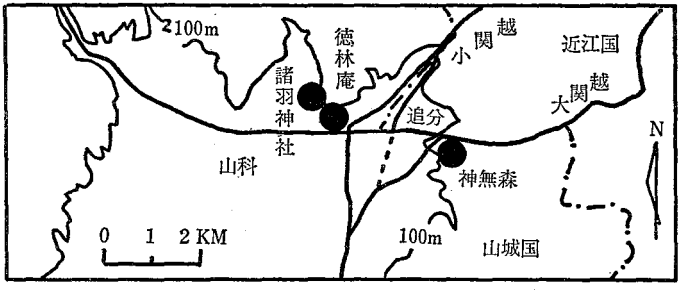

図2　山城・近江国境の疫神

た。

大化改新の詔で畿内の北限とされた相坂山は、大関越・小関越を含む山間地域に求められている(10)。大関越の大谷付近に逢坂山関の跡が推定されている。

『日本紀略』延暦一四年（七九五）八月一五日条(11)に相坂山関を廃止する記事がみられる。また、『日本後紀』延暦二三年（八〇四）六月二六日条(12)に山科駅を廃する記事がみられる。平安京を中心とする官道の整備にともなう処置と考えられる。特に長岡京時代から官道の「チマタ」を形成していた山科に、駅が設けられていたことが確認される。

これら官道に沿った山科の「チマタ」付近で疫神を祭祀したと考えられる所は、諸羽神社と徳林庵と神無森である。

諸羽神社は、平安時代前期の創建と伝えられる。四ノ宮と称し、現在祭神としてスサノヲノミコトが祭られている。当社は、神宮寺と推定される十禅寺とともに、仁明天皇第四子人康の居住であったと伝えられている。祭礼時には、神輿が東海道を東進し、追分の南側にある神無森（諸羽神社御旅所）へ渡る。

柳谷山徳林庵は、人康親王の菩提を葬うために草創されたと伝えられる。現在は山科六地蔵として有名で、伏見・鳥羽・桂・太秦・鞍馬とともに京都に囲む六ヶ所の六地蔵の一つとして信仰を集めている。『源平盛衰記』にも四の宮河原の六地蔵がみられ、現在徳林庵の建つ地名と同じである。

諸羽神社と徳林庵の建つ位置は、平安京を出た官道が大関越と小関越の分岐点を見る位置にあたる。南からは、奈良時代からの北陸道とも交差し、「チマタ」を形成している。

諸羽神社の御旅所である神無森は、現在由緒等が特に伝わっていないが、スサノヲノミコトを祭神とする諸羽神社と関係すること、『源平盛衰記』の木曾義仲が都落ちをする段に東進する際の一つのポイントとして神無森がみえること、鎌倉時代初期の作成と推定されている『山科郷古図』には、京都から大津へ向う東海道と醍醐から大津へ向う道が交差する所に神無森が記されていること、中世に山科七郷により神無森関が設けられたことから、国境の追分という「チマタ」で、街道の往来の際必ず通過する所とみられる。当所で国境疫神祭が行われた可能性がある。

また、『朝野群載』所収の天暦六年（九五二）六月二三日の宮宣旨(13)には、四境祭時に会坂堺へ祭祀が使われたことがみえ、山科・追分の「チマタ」から大関越・小関越にかけての地域で境界に関する祭祀が行われたことが認められる。

二　山城・丹波国境の疫神

山城・丹波の国境は、京都盆地の北西にあり、亀岡盆地との分水界である老ノ坂は、山陰道の通う峠となっている。奈良時代の山陰道は、木津川左岸を北へ進み淀川を渡り乙訓郡に入ると小畑川沿いに北西へ向い老ノ坂を越へて丹波に入った。長岡京時代も山陰道は都を出て、小畑川沿いのルートを沓襲したと推定されている。

平安時代の山陰道は、羅生門を出た後、西に向い桂川を渡り樫原を経て大枝、老ノ坂へと向う。奈良・長岡京時代の山陰道とは大枝の塚原付近で交差し、「チマタ」を形成していたと考えられる。この小畑川沿いの旧山陰道のルー

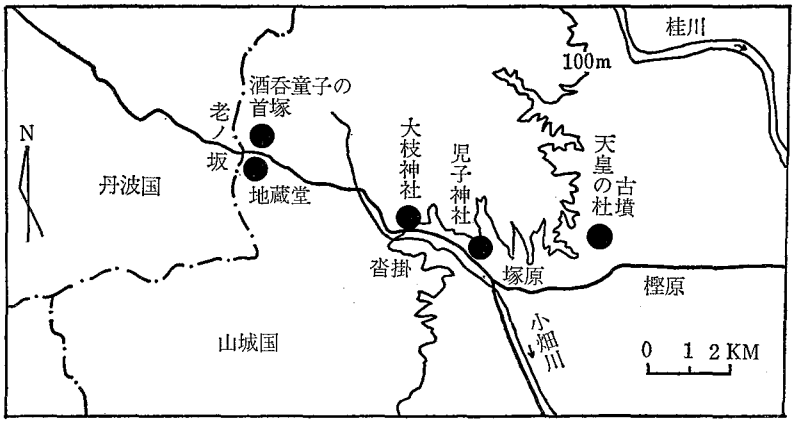

図3 山城・丹波国境の疫神

ト上に、長岡京や山城国府などが推定され、桂川に平行して通う山陽・南海併用道と山陰道を結ぶ乙訓郡内の主要な連絡路として平安時代に存在していたと考えられる。『平安遺文』一九九七号文書に「乙訓郡駅家里」(14)とみえ、駅家の存在が知られ、「長岡京の西北外城」に推定されている(15)。

また、『延喜式』巻第二十八兵部省条にみる大枝駅は(16)、山陰道丹波国となっており、竹岡林により老ノ坂の西側（丹波国）の現亀岡市篠町王子付近に推定されている(17)。老ノ坂をはさんで東西に大枝地名があったのか。大枝駅を現京都市西京区大枝とするなら山城・丹波国境が分水界を越えて京都盆地側に入り込んでいたと推定され、国境に移動があったと考えられる。本稿では、史料の記載と確認される国境をもとに、老ノ坂を国境として疫神祭神地の検討を行う。

新旧の山陰道が交差する大枝の「チマタ」付近には沓掛の大枝神社と塚原の児子神社が、樫原の天皇の杜古墳と老ノ坂の峠付近にある酒呑童子の首塚と地蔵堂も疫神の祭祀に関して注目される。

沓掛の大枝神社は、集落西方の小字関ノ山に在り関ノ明神と呼ばれている。これは、『山城志』(18)にも記載がある。大枝は、大江山の

伝説に出てくる酒呑童子の首塚が老ノ坂に伝えられたり、『続日本後紀』承和九年（八四二）七月一七日条に「大枝道」が出てきたり(19)、『朝野群載』所収の天暦六年（九五二）六月二三日の四境祭の官宣旨(20)のなかに大枝堺がみえ、平安京の西の境界として認識され、会坂と同様関が置かれたと推定される。

児子神社は、大枝の「チマタ」の西にあり、『山城志』の式内大井神社の条にみられる千児明神(21)と考えられる。乙訓郡の式内大井神社は現在所在等不詳となっている。『山城志』は千児明神をあて、『神名帳考証』は「岐神・木股神」(22)と記しており、大枝の「チマタ」付近に鎮座しているので注目される。『山城国式社考』は、老ノ坂のことを大井ノ坂からの音韻変化からきたと考え、大井神社の当地での鎮座を考えている(23)。

また、『神名帳考証』では、乙訓郡の式内国中神社の条で、沓掛村に所在を推定しており(24)、大枝神社か児子神社のことと推定される。国中神社も現在不詳の式内社であるが、社名から国ツ神を祭神としていたことが推定される。『神名帳考証』では国生神、大国玉命あるいは素戔嗚尊かとみられ、素戔嗚尊・大国玉命ら国ツ神系の祭神がいわれる。

大和・紀伊国境の疫神の一つと推定されている奈良県五条市今井の宇智神社の祭神も国生明神といわれ、国生明神は地主神（地祇神）とみられていることから、国ツ神系の疫神が祭神とみとめられている(25)。このようにみると、『神名帳考証』にみる国中神社も疫神祭祀を行っていたと考えられる。

平安京から桂川を渡った所にある樫原には、奈良時代前期の樫原廃寺とともに天皇の杜古墳がある。この古墳は、全長八六mの前方後円墳で、五世紀前半まで築造年代がさかのぼることができる。樫原から西に峠を越すと大枝に行き、さらに西進すれば老ノ坂を経て丹波へと向う。国境から約五kmとやや離れ、大枝の「チマタ」への入口にあたる

が、桂川の渡河点に近く、西ノ京の丘陵地への入口にあたる所に樫原は位置する。天皇の杜古墳の名称である天皇の杜の由来については不詳であるが、天皇は天王、つまり牛頭天王に通ずる地名とも考えることができ、地名から注目される。

現在、国道九号線は老ノ坂のやや北側を越し、付近には墓地が造られ、国道のバイパス工事も進み、旧道の老ノ坂はみるかげもない。しかし、老ノ坂の旧峠には、北に酒呑童子の首塚が伝わり、南には地蔵堂がある。

酒呑童子の首を埋めたと伝えられる塚の上には首塚大明神と呼ばれる小祠がある。この祠は、首から上の病気平癒の信仰を集めている。

例えば、京都府綴喜郡田辺町高船（山城国）には、奈良県生駒市高山（大和国）と接する国境があり、峠には瘡神社が祭られている。瘡（ホソ）は痘瘡つまり古代からの疫病を指し、国境の峠に疫気の侵入を防ぐものとして祭られたと推定され、病気平癒の信仰がある。地名に細峠などとして名前がみられるものも、疫神に関する信仰と結び付くものと推定される。酒呑童子の首塚と伝えられる首塚大明神も、疫気の侵入を防ぐために山城・丹波国境に祭られたものと考えられる。

また、地蔵堂は『山城志』に大福寺とされている(26)もので、やはり国境の峠を意識して旅の安全祈願や邪悪なものの侵入を防ぐことを祈願するためにたてられたものと考えられる。

三　山城・摂津国境の疫神

山城・摂津の国境は、北摂山地にあり、天王山麓の山崎で淀川を境とする。『行基年譜』天平三年（七三一）条に

山崎院が乙訓郡の无水川（水無瀬川）の側に建っていたことがみえ(27)、国境が水無瀬川から東へ移動したことも考えられる。水無瀬川流路の変更も考えられ、国境疫神祭の行われた所は、山崎から水無瀬川付近で検討する。

平安京の羅生門を出た山陽・南海併用道は、鳥羽の作り道を南に向い城南宮付近で桂川に平行する久我畷に入り南西に向い山崎に至る。山崎には駅が置かれ、淀川右岸を進む山陽道と淀川を左岸に渡って南に向う南海道が分岐し、官道の「チマタ」を形成した。淀川水運に関連した河港でもあり、水陸交通の接点を為していた。また、山崎も会坂大枝とともに『朝野群載』所収の天暦六年（九五二）六月二三日の官宣旨(28)にみる四堺の一つで、境堺祭祀の要地として認識されていた。

山崎の「チマタ」付近にみる疫神祭祀地は、天王山の酒解神社、現大阪府三島郡島本町山崎の関大明神社と広瀬の若山神社である。

天王山の酒解神社は、山城国乙訓郡の式内大社である自玉手祭来酒解神社と推定される。当社は『都名所図会』に大山崎天王の社、『雍州府志』に牛頭天王社とみえ、一般には天神八王子社と呼ばれていた。明治一〇年（一八七七）に酒解神社に比定され改称された。『延喜式』は自玉手祭来酒解神社はもと山崎社であったと記している(29)。この神社は、長岡京遷都に際して玉手から酒解神を勧請し、天王山中へ合祀したものと伝えられる。

また、天王山も、もとは山崎山といわれていたが、牛頭天王が祭祀されていたことから天王山へと地名が転化したと考えられている。

山崎とのつながりが強く、その信仰を集めていた酒解神社は、山崎の「チマタ」と摂津国境から大阪平野をみる位置に鎮座していた。

岡田精司は、「酒と辟が訓の共通から通じて用いられている」、「「酒解神」は辟邪神＝塞神の一種であって交通の要地と考えられる」と指摘してお(30)り、酒解神社は山崎付近にあり、国境で祭祀された疫神と考えられる。

関大明神社と若山神社は、摂津側に鎮座する。関大明神社は水無川の東側、現島本町山崎小字関戸裏に、若山神社は水無川の西側、現島本町広瀬小字若山にそれぞれ鎮座する。

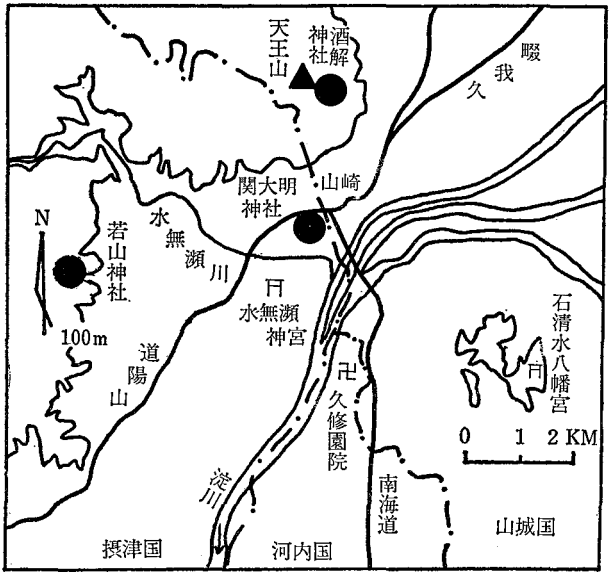

図4 山城・摂津，山城・河内国境の疫神

山城から摂津国境を越えるとすぐ鎮している関大明神社の由緒は不詳であるが、国ツ神の系譜にあたる大己貴命を祭神とし、「疫神をせきとめる神でもあるし、咳どめの神」と『島本町史』(31)にみえ、疫神を祭祀している。

山城側を大山崎、摂津側を山崎とよぶ地名は、国境が定められたため識別をする必要上発生したものと考えられ、本来淀川右岸の狭隘部を指して山崎と呼んでいたと推定される。このことからも山崎あるいは乙訓郡の領域は水無瀬川まで広がっていたと推定される。

若山神社は、水無川を西に越えた広瀬にあり、祭神はスサノヲノミコト、大宝元年（七〇一）に創建されたと伝えられている。また、当社は西天王山ともいわれ、国境をはさんで対峙する東の山崎の天王山に対した名称と考えられ

る。

以上の検討から、国境付近で官道の「チマタ」を形成し、交通の要地で駅の置かれた山崎に信仰を持つ天王山の式内自玉手祭来酒解神社で国境疫神祭が行われたものと推定できる。

四　山城・河内国境の疫神

山崎・河内の国境は、京阪奈丘陵から男山の西側を通り淀川で摂津国境とも接している。

山崎駅で分岐した南海道は、淀川を渡り橋本から河内国楠葉へと向う。

また、奈良時代の山陽道は、木津川左岸を山本駅を経て河内国楠葉に向う。その際、普賢寺河谷から河内へ入るルート(32)と男山付近で河内国境を越えるルート(33)が推定されている。時間や距離といったことを考えると、男山付近で河内に入るルートが妥当と推定される。

まず、山崎駅から分岐した南海道であるが、奈良時代に行基により架橋された山崎橋のたもとと考えられる橋本を経て、国境を越えて河内の楠葉に向う。『行基年譜』神亀二年（七二五）条に河内国の久修園院が山崎となっており(34)、『続日本紀』宝亀四年（七七三）一一月二〇日条に河内国山崎院がみえ(35)、山崎は水無瀬川付近のみならず、淀川左岸にも広がっていたと考えられる。ただし、淀川左岸の範囲は、河内国の領域となっており、淀川を渡り左岸に行くと河内と意識していたと推定される。そのように考えると、河内との国境に祭祀された疫神は、天王山に鎮座する酒解神社と考えられる。

山城国乙訓郡の山崎は、先に述べたように、山陽道と南海道の分岐点であり、主要な官道による「チマタ」が形成

されていた。よって、山城と摂津および河内へと連なる国境の「チマタ」と考えられる。その「チマタ」を見る所に鎮座する酒解神社は、山城・摂津国境に祭られた疫神であったとともに、山城・河内国境で祭られた疫神であったと考えられる。

木津川左岸の支流普賢寺川上流の天王には、式内社と推定される朱智神社がある。当社は、祭神に牛頭天王を持ち、山崎の天王山と同様に鎮座地の地名にも転化している。この鎮座地は、山城・河内の国境のみならず大和とも接しており、三国の国境地域に位置する。

山城から河内への主要道とも指摘される普賢寺河谷と穂河谷（河内）を結ぶ交通路に沿って朱智神社は鎮座している。

普賢寺河谷の上流部にはこの他、打田の須賀神社（祭神　スサノヲノミコト）と高船の瘡神社といった疫神を祭祀する神社がみられる。いずれも、大和との国境を接しており、民間に境界疫神祭祀が広がり、信仰がもたれたと考えられる。

朱智神社は、榊遷という行事を通じて京都の八坂神社とつながり、式内社と推定されているので、山城・河内の国境の疫神祭祀地とも考えられるが、平安京を中心とした交通路の体系を考えると主要道から南にそれた京阪奈丘陵中に鎮座していること、奈良時代の山陽道も普賢寺河谷を想定することは少し無理があること、打田や高船で疫神が祭られていることから、大和と河内国境ということで疫神祭祀が行われたと推定されるが、国家祭祀として行われた疫神祭祀地とは考えにくい。

五　山城・大和国境の疫神

山城・大和の国境は、京阪奈丘陵から平城山丘陵を経て大和高原へと続く。奈良時代の東海・東山・北陸併用道と山陰・山陽併用道の通った平城山丘陵周辺で疫神祭祀を検討する。

奈良坂越・コナベ越を経て山城に入った東海・東山・北陸併用道は、木津付近で木津河谷を東に向う東海道と泉大橋を渡って木津川右岸を北向する東山・北陸併用道に分岐し、「チマタ」を形成する。木津の「チマタ」付近には岡田国神社と木津天王社が疫神を祭っている。

岡田国神社は、山城国相楽郡に属する式内大社である。当社は、現加茂町大野の勝手神社内の春日神社とともに論社となっている。木津の岡田国神社はもと天神社と称しており、明治一一年（一八七八）五月に岡田国神社と改称された。

現在はオカダクニ神社と呼ばれているが、もともと「オカダクニノ」神社と呼ばれていたのか「オカダクニツカミノ」社と呼ばれていたのかという呼称に問題がある。後者の場合岡田という地域に国ツ神を祭祀していたことが明白であり、国ツ神は系譜上スサノヲノミコトに通じ、音韻からはクズ神・ゴズ神に通じるものであり、疫神と考えられる。また、式内社の比定に関しては、岡田という地域の領域の検討が必要である。

木津の岡田国神社は、生国魂命が祭神で、地祇神や国ツ神としてクズ神に通じる疫神と考えられる。当社は、西に木津の「チマタ」をみる位置に鎮座している。

木津天王社は、『山辺郡史』に中峰山の牛頭天王（現奈良県山辺郡山添村　大和・伊賀国境に祭る疫神）の説明に

際して国分天王社（現大阪府柏原市）と天王畑（現京都府綴喜郡田辺町）とともにみえ(36)、山城・大和国境の疫神と認識されていた。

当社は現在の木津の市街地に取り込まれ、国道一六三号線と恭仁京右京の中軸線であったと推定されている道（以下「作り道」と称する）(37)の交差点の南東隅に鎮座している。地元では「祇園さん」とよばれ、スサノヲノミコト即ち牛頭天王を祭神している。また、恭仁京復原プラン(38)の中で当社の位置をみると、右京七条大路と「作り道」の交差点の北東隅に鎮座することになる。

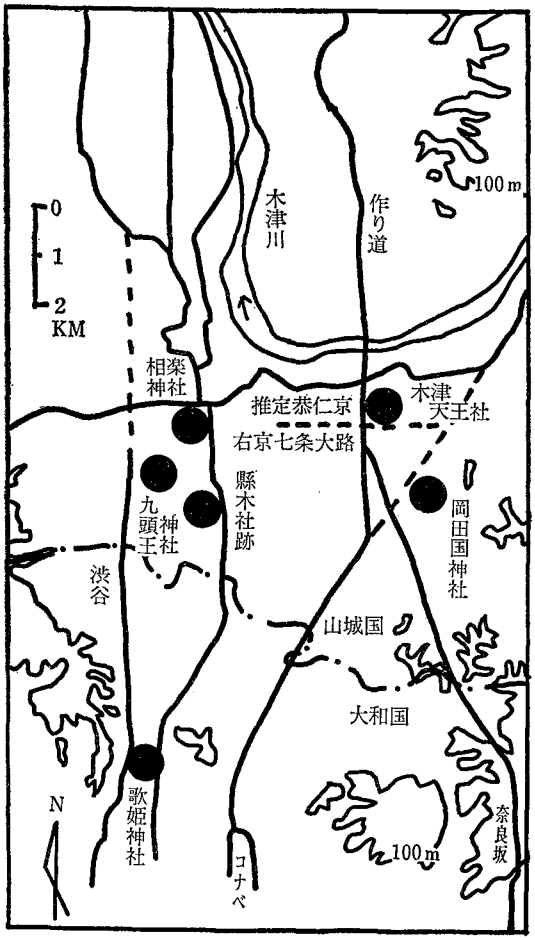

図5　山城・大和国境の疫神

いずれにせよ「チマタ」に鎮座し、「作り道」を南下すれば奈良坂越・コナベ越にて大和に入る絶好の位置を占めている。しかし、当社の由緒は応永年間（一三九四―一四二

八）に創建と伝えていること、社殿の建築も室町時代とされていることから、古代からの存在が確認されない。木津川旧流路の検討とともに立地を検討する必要がある。

歌姫越・渋谷越で山城に入ったと推される山陰・山陽併用道は、相楽で木津へ向う東向の道と山田河谷を西へ向う河内への道と交差する「チマタ」を作る。木津と河内を結ぶ道は、泉大橋付近から四条畷を結ぶもので、奈良時代に存在していた(39)ことが指摘されている。

相楽の「チマタ」付近には、相楽神社と縣木社跡と九頭王神社が疫神と考えられる。

相楽神社は、式内社と推定される神社で現木津町相楽に鎮座する。歌姫越の道と河内へ向う道の交差する南西にある。祭神は現在、足仲彦命と誉田別命と気長足姫命であるが、『神名帳考証』には韓神とある(40)。池田末則は「韓の字音は国語でクニの意」「大国主・大己貴の主・貴は尊称で、大国・大己は韓（クニ）と同義の美称と考えられる」(41)と指摘し、韓神はクニ神、クニツ神に通じるものであり、韓神を祭神としていたなら相楽神社も疫神の祭祀地と考えられる。

歌姫街道を相楽から南に向い大和へ進んでいくと、縣木社跡と伝えられる所に石地蔵群がある。縣木社については由緒等不詳であるが、足利健亮が指摘する(42)ように『古事記』垂仁天皇段にみられる地名説話から、縣木は相楽とみることができる。してみると、縣木社は相楽社となり、相楽神社の旧社地を伝えているものかもしれない。

現在縣木社跡と伝える所は、石地蔵が数体あり、一里塚的存在のものとみとめられている。足利健亮も「この地点が縣木社と言い伝えられてきたことは認めてもよいであろう」と述べており(43)、道に関する信仰が何らかのかたちでもたれたと判断する。また、当地点は相楽より山城・大和の国境に近い。

九頭王神社は、相楽の大里と曾根山の西側の丘陵に鎮座している。当社の由緒は不詳であるが、社名からクズ神つまり疫神を祭祀していたものと推定される。この丘陵は、北に相楽の「チマタ」、東に歌姫越、西に渋谷越の街道をみる位置にあり、鎮座地の条件がよいので国境に鎮座する疫神として無視できない。

また、歌姫街道に沿っては、大和側の歌姫に歌姫神社がある。当社は大和国添下郡に属する式内大社添御縣坐神社と推定されており、祭神にはスサノヲノミコトがみられる。奈良時代の山陰・山陽併用道が、歌姫越・渋谷越のいずれであったかはともかく、近世には歌姫越の八幡・郡山街道として機能していた歌姫越は谷幅も広く古くからの街道を沓襲していたものと考えられる。その歌姫越に沿ってみられる歌姫神社は、大和側にみられるので『続日本紀』神護景雲四年（七七〇）六月二日条(44)にみられる疫神の一つとも考えられる。

六　山城・伊賀国境の疫神

山城・伊賀の国境は、木津川の河谷を横断している。山城国は、木津河谷を領有しているので南東方面に張り出している。平安京を中心とする交通路体系からは大きくそれているが、平城京を出た奈良時代の東海道は、木津の「チマタ」で東山・北陸併用道と分かれ、木津川の谷を東へすすむ。伊賀国に進み加太の峠を越えて鈴鹿川の河谷へと向う。山城が伊賀と国境を接しているのは、この地域のみである。山城・伊賀の国境で行われた疫神祭祀地の検討は木津河谷で行う。

疫神祭祀地と注目されるのは、有市の国津神社と大河原の国津神社である。両国津神社とも式内社ではないが、『三代実録』貞観元年（八五九）五月二八日条(45)にはそろって従五位下から従五位上へ神位を上げて授かっている。

21　古代山城国境での疫神祭祀地と主要な通路

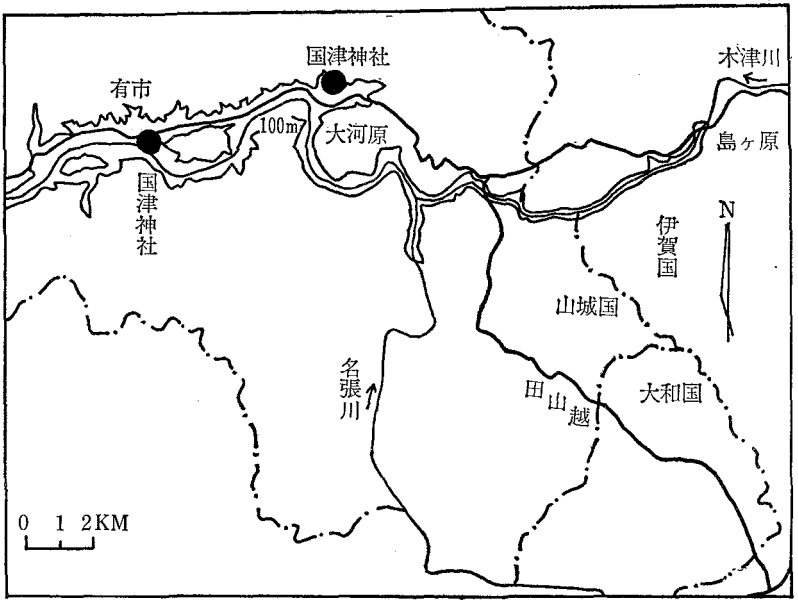

図6　山城・伊賀国境の疫神

この事実から官社化されていたと推定される。

現在の祭神は、大河原の国津神社が天照皇大神・天児屋根命・誉田別命・伊邪那美尊・白山昆売命一言主であり、有市の国津神社が大国主命である。疫神とみられる国ツ神の系譜につらなる祭神を持つのは有市の国津神社である。しかし、両社とも社名はクズ神社であり、国ツ神ノ社とも読めるので、もとは疫神の祭祀が行われていたものと推定される。

『神名帳考証』の岡田国神社の条には、岡田国神社が笠置川（木津川？）辺にあり、国津明神と称していると記している(46)。『神名帳考証』では「オカダクニツカミノ」社と読んで、国津神社を指したものと考えられる。前章で岡田国神社の検討をしておるが、相楽郡内で式内岡田国神社と有市・大河原の国津神の関係は、現在のところ不明である。

地理的位置からみると、山城・伊賀国境は有市よりも大河原の方が近く、一条兼良も『藤川の記』に

「大河原という所は伊賀と山城とのさかひなり」と書いており、大河原で国境が意識されていたと思われる。また、大河原は伊賀の上野へ向う島ヶ原越の道と田山越の道が分岐するところでもあり、「チマタ」を形成している。

まとめ

山城・近江国境の疫神祭祀地は、奈良・長岡京時代の東山・北陸併用道と平安時代の東海・東山併用道が交差し、両国境付近の山科盆地北東部に位置、平安時代の創建と伝えられる諸羽神社と徳林庵および神無森があげられる。

山城・丹波国境の疫神祭祀地は、奈良・長岡京時代と平安時代の山陰道の交差する大枝の沓掛神社（関ノ明神）の児子神社（式内大井神社）、樫原の天皇の杜古墳、老ノ坂の酒呑童子の首塚と地蔵堂があげられる。

山城・摂津および山城・河内国境の疫神祭祀地は、山陽道と南海道の分岐する山崎の天王山中にある酒解神社（式内自玉手祭来酒解神社）と推定される。

山城・大和国境の疫神は、奈良時代の東海・東山・北陸道の分岐する木津に岡田国神社（式内社）と木津天王社、奈良時代の山陰・山陽併用道と河内へ向う道の分岐する相楽に相楽神社（式内社）と縣木社跡と九頭王神社、歌姫越に沿った大和側の歌姫に歌姫神社（式内添御縣坐神社）があげられる。

山城・伊賀国境の疫神祭祀地は、木津河谷に東西に伸びる奈良時代の東海道に沿って、大河原の国津神社と有市の国津神社があげられる。

検討された疫神祭祀地の大部分は、それぞれ国境付近の主要道が作る「チマタ」に立地している。主要道は、当時の七道の他古い時代の七道に相当するもので、山城国内の主要集落間の連絡に使われていたものと推定され、それぞ

れのチマタは国外へ出向く際には必ず通過する地点である。

比定を試みた疫神祭祀地の大部分は、式内社および神位の授与などから官社化されたと推定される神社である。

〔付　記〕

本稿は、歴史地理学会第三〇回大会（於筑波大学）で発表させていただいた「古代山城国境での疫神祭祀と主要交通路」に加筆・修正を加えたものである。本稿作成にあたり、現地調査その他でお世話になった田中嘉明氏、西村雅氏、森元文子氏、小川健太郎氏をはじめ、多くのご批判とご意見をいただいた諸先学諸学兄に深く感謝を致します。

註

（1）「宮城四隅疫神祭　若応祭京城四隅准此」。

「畿内堺十処疫神祭　山城與近江堺一山城與丹波堺二山城與摂津堺三山城與河内堺四山城與大和堺五山城與伊賀堺六大和與伊賀堺七大和與紀伊堺八和泉與紀伊堺九摂津與播磨堺十」。

（2）立川昭二『病いと人間の文化史』新潮社一九八四。

（3）「国神之怒天皇曰宜付情願人稲自宿禰試令拝大臣跪受而忻悦安置小墾田家勲脩出世業為因浄捨向原家為寺於後国行疫気民致天残」。

（4）「勅曰如聞比日太宰府疫死者多思欲救療疫気以斉民命是以奉弊彼部神祇為民禱祈焉又府大寺及別国諸寺読金剛般若経仍遣使賑給疫民幷加湯薬又其長門以還諸国守若介専斉戒道饗祭祀」。

（5）四月一九日「大宰府管内諸国疫瘡時行百姓多死詔奉弊於部内諸社以祈禱焉又賑恤貧疫之家幷給湯薬療之」、五月一九日「四月以来疫早並行田苗燋萎由是祈禱山川奠祭神祇未得効験至今猶苦」、六月甲辰「廃朝以百官官人患疫也」、七月五日「賑給大倭伊豆若狭三国飢疫百姓」、七月一五日「大赦天下詔曰比来縁有疫気多発祈祭神祇」他にも記事があり天平九年の条の最後に「是年春疫瘡大発自筑紫来経夏渉秋公卿以下天下百姓相継没死不可勝計近代以来未之有也」とみえる。

（6）前田晴人「古代国家の境界祭祀とその地域性（上）」続日本紀研究二一五　一九七八。

拙　稿「古代の国境疫神祭祀と主要交通路」大阪教育大学地理学会会報一二　一九八六。
拙　稿「古代畿内東限の疫神祭祀地と主要交通路」地理学報二四　一九八六。
拙　稿「古代日本の境界祭祀と主要交通路」和歌山地理六　一九八六。

(7)「祭疫神於京師四隅畿内十堺」。

(8)「祭使　右弁官下　山城国　和邇堺使　蔭子橘兼舒従三人　陰陽允中原善益従三人　祝　少属秦春連従三人　奉礼　陰陽師布留満樹従二人　祭郎　学生四人従一人　左衛門府生美努定信従二人　看督長一人従一人　火長一人　会坂堺　同前　大枝堺　同前　山崎堺　同前　右今月七日為祭治効外四所鬼気差件等人宛使発遣者国宜承知依例供給官符追下　天暦六年六月廿三日　大史阿蘇宿禰　右大弁藤原朝臣」。

(9) 池田末則『日本地名伝承論』平凡社　一九七七。
松前健「祓園牛頭天王社の創健と天王信仰の源流」『古代学叢論』一九八四。

(10) 武藤直「相坂山と勢多橋」『新修大津市史1　古代』一九七八。

(11)「廃近江国相坂剗」。

(12)「停山城国山科駅」。

(13) 前掲(8)。

(14) 山城国富坂荘預解「駅家里　二坪三段」。

(15) 足利健亮「山城国」『古代日本の交通路』I　大明堂　一九七八。

(16)「山陰道　丹波国駅馬　大枝野口小野長柄星角佐治各八疋」。

(17) 竹岡林「丹波国」『古代日本の交通路』III　大明堂　一九七八。

(18)「沓掛村西有関明神　小祠　陰陽道官使当修此其一」。

(19)「是日春宮坊帯刀伴健岑但馬権守従五位下橘朝臣逸勢等謀反事発覚……（中略）……亦令固山城国五道……（中略）……侍従五位下清原真人秋雄守大枝道……」。

(20) 前掲(11)。

(21)「在沓掛村　今称千児明神」。

(22)「大井神社　岐神　木股神」。
(23)「此沓掛村は老坂の東に隣れり、オオイホヰ音近し、故に此社にあてたる歟、又老坂はもと大井坂なりしか」。
(24)「沓掛村　沓国津也　掛霊　旧事紀云　国中之天柱　儀式帳云　国生神見大国玉命　按生與中語相渉　国中素戔嗚尊歟」。
(25)前掲(6)拙稿「古代日本の境界祭祀と主要交通路」和歌山地理六　一九八六。
(26)「在沓掛村上方嶺有地蔵堂号大福寺」。
(26)「行年六十四歳　聖武天皇八年天平三年辛未……（中略）……山埼院　在同国乙訓郡山前郷无水河側」。
(29)前掲(8)。
(29)『延喜式』巻第九神名上条「自玉手祭来酒解神社　名神大月次新嘗　元名山埼社」
(30)岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房　一九七〇。
(31)井上栄光　岡本四郎「社寺と民俗行事」『島本町史』一九七五。
(32)桑原公徳「南山城の条里と駅路に関する若干の考察」史想一〇　一九五九。
(33)前掲(15)。
(34)「行年五十八歳乙丑　聖武天皇二年神亀二年乙丑　久修園院山埼　九月起　右河内国交野郡一条内」。
(35)「勅故大僧正行基法師戒行具足智徳兼備先代之所推仰後生以為耳目其修行之院……（中略）……河内国山埼院二町」。
(36)『山辺郡史』中　一九一四。
(37)足利健亮「恭仁京の歴史地理学的研究、第一報—現景観の観察・測定にもとずく朝堂院・内裏・宮城および右京「作り道考—」」史林五二—三　一九六九。
足利健亮『日本古代地理研究』大明堂　一九八五。
(38)木津町史編さん委員会編『木津町史』史料編Ⅰ　一九八四の附図による。
(39)森郁夫「畿内における平城宮系軒瓦の一側面」国学院雑誌七八—九　一九七七。
(40)「相楽神社　岐神」。
(41)前掲(9)池田末則『日本地名伝承論』平凡社　一九七七。
(42)足利健亮「下ッ道の広がりとうつろい」環境文化四〇　一九七九。

(43) 前掲(42)。
(44) 前掲(7)。
(45) 「山城国従五位下大川原国津神　有市国津神　正六位天照御門神　並従五位上」。
(46) 「今在笠置河辺称国津神　天津彦根命」。